

# 未来の都市をめざして

たむら あきら  
田村 明

## 1 文明史的視点と実践的視点

都市の未来を考えるのに、私は長期の文明史的視点と、現実の実践的視点の両者の視点が必要だと思っている。

都市は人類の歴史とともにあり、人類の文明そのものである。文明を意味する civilization と、都市を意味する city とは同一語源から生まれている。文明のあるところに都市があり、都市は文明を生み、その時代を象徴する文化が栄えた。

しかも、後にのべるように、現在は文明の大きな転換期であり、それを示すのが現代都市の姿である。これからの都市を考えるのには大きな流れとしての文明史的視点が必要なのである。

一方において、都市は極めて日常的なものであり、我々の生活全体を覆っている。あまりに日常的であるためにはっきり感じないほどである。しかし、都市を変えるのは、漠然たる傾向や流れではなく、実は日常的な行為の積上げの結果なのである。よりよい都市を望むなら、たとえ小さくても日常的実践を積み重ねてゆかなくてはならない。この次元を無視しては単なる評論に終わってしまうだろう。望ましいことがなぜ実現されないのかは、多くの理由がある。その障害を取りのぞくのは、実践の場しかありえない。

文明史的視点と、実践的視点とでは、あまりにも大きく離れすぎているように見える。しかし、この両者の中間にあらゆる問題が見えるはずである。

我々は未来のことを正確に知ることはできないが、大きな歴史のなかで過去の歴史は我々に未来を教えてくれる。しかし、未来は今日からすでに始まっている。今日現在の中での実践的視点と行動をもたなければ、ただ未来について評論し、予想屋的に無責任な予測をたてるにすぎないことになる。

技術革新、高度情報化社会、国際化などへの変化を見ることはもちろん重要だが、それらは文明史の流れの中での局部的現象なのである。近視眼的な傾向にふりまわされるだけでなく、大きな歴史の流れの中で都市を考えてゆく必要がある。

文明史的視点とは人間そのものの存在とあり方から発して、これが、自然に対してどういう関係を持ち、人間同志がどのような関係をもったかという視点である。始めから今まで、またこれからも永続的に存在する自然を無視することはできない。文明＝自然×人間の営み、という式であらわされる。無から有は生じえない。文明は人間が自然に学び、自然を利用し、自然から恵みを引きだした営みが基礎である。人間の営みはまた、人間の営み＝自然へのかかわり×社会とのかかわり×自分とのかかわり、という式で表せよう。人間は自然にかかわるのに始めは個人や小集団であったが、やがて社会をつくった。その社会的な力で自然にかかわったとき、文明という次元が生まれた。個人的なかわりでは、人類はまだ自然の一部であった。ところが社会をつくと大きな力をもつようになり、集団の力で都市をつくりあげた。この社会をどのようにつくり、どのようにかかわり、どのような価値観をもつか、文明のあり方を定め、さまざまの文明をつくってきた。社会的な関係をもつことによって、人類は、人と人との間、その関係を主にする人間となるのである。

しかし、人間は社会の中だけにいるのではなく、やはり一個の生物であり、自分自身である。どんなに社会が進歩しても、いや進歩すればするほど、自分との不協和をまねきやすい。現代のさまざまなストレスといわれるものも、社会との関係の裏返しである自分とのかかわり方の不調和である。自分自身とどうかかわるかは、個人にとっては一生続く最大の課題である。

自分自身として、一人の人間として自然と直接にかかわるときに、多くのものが自然から教えられる。他の人間や文化とのかかわりもそうであるが、それには一人の人間として開いた感受性をもっていることが必要である。自分自身とそうしたかかわり方をしている人ならば、自然や社会とのかかわりの中で喜びを感じとり、あるいは新しい価値観や芸術を生みだすだろう。たとえその当時の社会の価値観と異なっても、一人の自分自身は新たな感受性をもって自然や社会に接しられる。社会的価値の中だけに埋没しては新しいものは生まれない。かつてすぐれた発明、発見をしたといわれる人々、ガリレオもニュートンもアインシュタインも当時の社会的価値観に埋没していない自分自身をもっていた。ダ・ビンチもピカソもすべて自分自身の新しい美意識をもち、それが社会に公認されることになった。

これらのさまざまな人間の営みによって、自然は解釈され、利用され、評価されてきたのである。文明史的視点とは、自然と、社会と、人間それ自身とのかかわり方の歴史をとらえる視点である。過去の都市も、現在の都市も、また、未来の都市も、このような中でとらえなければならぬだろう。

このような偉大な人々は新しい価値をつくりだし切り開いたが、都市は一般の人々の住むところである。感受性を失なった人々だけが住む都市では美しい街ができるはずはないし、人の心を乾いたものにさせてゆく。人々の気持の持ち方が社会を変え、自然を変え、都市を変える。また、逆に

自然や都市が人に、心の持ち方を教えてくれることもある。

都市の未来を考えると、ひとつの側面 — たとえば高度技術といった側面からだけで考えてゆくことはできない。自然に対する社会のかかわり方の手段が技術であるが、それにも、人の感情や情緒を入れることはできる。個人がそう思い、多くの人がそう思い、だれかがそれを実践したときである。都市を美しくするなど軽蔑された時代もあった。つい10数年前はそうだった。今は、誰もが美しいのがいいという。しかし、時代の流れのままではなく、誰かが「都市は美しい方がいい」と思い、それを実践しなければ、社会の価値観も変わらない。抽象的な時代の流れも実はそうした小さな実践から生まれてくる。

この小論で、都市の未来を考えることは至難の業である。だが、少なくとも、こうしたトータルな目で都市をとらえ、しかも、身近かな、自分たちにかかわりのある現実の存在、今の私たちの考えや行動が、少しでも都市の未来をつくってゆくという立場をとりたいのである。

## 2 都市の時代

20世紀も間もなく終わろうとしている。すでに各所で21世紀が語られている。

20世紀は都市の時代であった。もっと正確に言えば、本格的な都市の時代としての21世紀を迎える転換の世紀であった。20世紀は、「都市化の時代」であり、「都市変革の時代」であった。

都市の発生は古い。どれを都市の起源とみるかには意見の相異がある。一般には、チグリス、ユーフラテス河周辺のメソポタミヤに発生したシュメール王国の諸都市であるとされている。これらの都市は、バベルの塔説話の原型と見られる壮大なジグラッドを築き上げた。早いものはBC3000年ごろに建設された。ウルクでは壁を石灰でおおった「白の神殿」とよばれるものがある。それがBC 1500年ごろのバビロンになると高さ90mの七

層のジグラッドが建設され、都市周辺を囲む内壁の高さは20mもあったといわれる。インダス川流域のモヘンジョダロやハラッパーもBC 2500 ~ 1500 年位の間に、下水や公衆浴場を整備した都市をつくった。

しかも、それより古い都市がある。最も古くは、トルコのチャタル・ビュルクや、ヨルダン西部にあるエリコであろう。とくにエリコは聖書で知られている。しかし、発掘により、聖書に書かれた時代はおそらくBC1400 ~ 1200年ごろであったろうが、その時まですでに5500年以上を経過し、BC 7000年、今から何と9000年も前に小さな神殿をもち、2mほどの外壁をもった都市をつくっている。

都市の条件とは、①定住住民がおり、②住民に職業分化が見られ、専門家としての技能者や神官などが発生しており、③食糧を自給できないため、周辺の農業、牧畜の人々から供給をおおぎ、④公共建築物、建造物が存在しており、⑤このような公共性を支えるための何等かの社会システムが存在していること、などがあげられる。

都市の成立は、食糧を自給自足し、専門家のような職業分化を見ない農村や遊牧民からみると革命的な事件であった。G・チャイルドは、この現象を都市革命と名づけた。都市革命は古くは今から9000年前に始まる。

我が国の場合はずっと下る。邪馬台国時代はとて都とはいえるものはない。我が国に本格的な都市らしきものが現れてきたのは7世紀末の藤原京だろう。それまでは、都といっても、天皇の住まいがすなわち宮であり、都であり、度々かたんに移転した。宮殿や寺も個々に建てられてはいるが、都市とはいえそうもない。都市の歴史はせいぜい1300年ていどと見てよいであろう。

しかし、都市の歴史が9000年にしろ、1300年にしろ、これまでの都市は全人口からみると全く例外的な存在であって、いわば農村社会や牧畜社会に浮ぶ小さな島のような存在であった。社会全体としては都市社会ではなく、農村あるいは牧畜社会であった。都市は食糧を自給自足できない。

それは農村社会の余剰生産物に依存して養われる。したがって都市人口は総人口の数パーセント、多くても10%をこえることはなかった。

都市であるかないかは、城壁をめぐるしているかどうか極めて分かりやすい。西欧やアラブ、中国などの都市は原則的に城壁をもっていた。これに対して我が国のものは城壁をもたない。城壁のある場合は、農村の中に浮ぶ島としての形が明確であるが、城壁のない場合には、農村の淡い色が濃くなったところというようになっていて、その区分があいまいである。

城壁をもつ都市は、視覚的にも農村と明確に区分され、明確な都市市民意識をもっていた。我が国の場合には、領主のもつ城砦はあっても、市民のつくる都城はなかった。都市も農村の中にただよい、溶解していた。中世の堺、近世の三都に少しばかり見られるほかには、都市市民としての意識は少ない。支配者であった武士階級がそもそも米に依存する農村体質であり、質量ともに農村型社会であった。

それが今日変わろうとしている。18世紀から始まった産業革命は、まず先進国イギリスが工業化を進め、急激な都市化を招いた。ヨーロッパ諸国やアメリカがこれに続く。日本も戦中の中断を経て、1950年代後半からは急激に都市化し、都市型社会へ変化する。社会主義国や第三世界も、都市化がすすみ、今世紀末には、先進国はもちろん、世界中が都市型社会に変化する。

先進諸国は数量的に見てもすでに70%が都市化し、なかには90%近い都市化の国もあるが、発展途上国の都市化もすでに35%でいどとなっており、1980年時点で世界の都市人口約18億人のうち、発展途上国が10億人余り、先進国で約8億人となっている。今世紀末には、発展途上国の都市人口も5割近くに達するだろう。

これは都市化率の数字が増加したというだけではない。これまでの人類の長い間の農村型社会から、僅かこの1世紀の間に世界中が全く新しい都市

型社会へと転換することを意味する。

もちろん、都市現象は、たんに都市化率という都市居住人口の全人口に対する比で表すだけのものではない。そうした数量的な表し方には、いろいろな数値もあり、統計的には国により異なる。それよりも今日は、都市化という量よりも、都市現象というべき、都市的な生活様式、生活意識、社会意識が、狭い意味の都市だけではなく、広く農村や自然の地まで覆っている。日本はすでに列島都市国家といってよい。

それはこれまでの経験の延長ではなく、突如として全く新しい時代へ突入した時代だった。1世紀などは文明史の中では極めて短かい。日本の場合には、ほとんどの人々が農村に居住していた社会から、僅か20~30年の間に、逆にほとんどの人々が都市に居住し、あるいは都市的生活をする社会へと変化した。多少の遅速はあっても、世界全体がそうなる。これは文明史次元での革命である。9000年ほど前が都市革命なら、第2都市革命というべきだろうか。K・ボウルディングにいわせると、これまでの文明時代が終わり、新しいポスト・文明時代の始まりだとも見る。

我々はこの大転換の真只中にいるので、それが見えにくいのが、好むと好まざるとにかかわらず、農村型社会に代わって、新しい都市型社会の中に投げこまれた。これに対応して空間や環境を整え、個人もまたその中で生きるかかわり方を学ばなくてはならない。

これまでのように、農村が主体で、都市は例外あるいは少数派であったときは、都市はこれを利用の対象とするだけでもすんでいた。都市で学び、働きはするが、いつか故郷へ帰ってという意識が、つい最近まであった。だが、今日では、都市に生まれ、都市で生き、都市で死ぬほかはない人々が主流である。他人ごとのように都市を考えることはできない。都市の問題は社会全体の基本問題になるし、また、個人にとっても身近な課題である。現代の都市も、現代社会の産物であり、けっきょくは、個人として、あるいは企業人として、あるいは公務員としての人々の働きや営みの集積

としてできてくる。人々もまた現代都市に生きなくてはならない、都市の支配を受ける身であるが、他方、その都市の現在をつくってきた責任があり未来に対しても責任をもっているということを忘れてはならない。

### 3 都市政策の必要性

21世紀は時間がたてばやってくる。都市現象も、今の文明の構造が都市の時代をもたらしたので放置しておいてもそうなるだろう。

しかし、時間がたてば2001年になるというのと、時がたてば世界中に都市の時代が来るといふのは意味がちがう。前者は時間の流れという抗しようのない客観的な流れであるが、後者は、人類全体の営みの結果そうなるゆへということである。決して自然にそうなるのではなく、人類の選択と行動の結果そうするのである。だからアメリカのような文明国の中でも、文明の利益を受入れないアーミッシュのような人々が、自分の選択として存在している。

それは、一人の権力者や帝王の力でそうしたのではない。かつては皇帝や帝王が都市をつくったこともある。しかし、それは都市が全人口の1割に充たない農村時代の中の都市にすぎない。

今日の都市はちがう。多くの世界の人類が選択し行動した結果である。都市をつくる技術も、都市を動かすメカニズムも、その基本になる社会・経済システムも、多くの人々がそれを好ましいと思ったことによる。帝王や皇帝ではなく、経済体制によるという説明がなされたこともある。しかし、都市の時代は多少の遅速はあっても経済体制の別なく進んでいる。経済体制の相違よりも、経済発展の進行スピードが速く都市化した国と、比較のおそい国とを分けた。しかし、これさえも、文明史的次元から見れば大した差はない。

大衆が、文明的生活、都市的生活をのぞみ科学技術がそれを可能にした。大衆は自動車をのぞみ、ヘンリー・フォードはその夢をかなえるT型



フォードを生み出した。フォードも巨万の富を得たが、それまで一部の人の独占物でしかなかった自動車を大衆の物に変え、大衆をよろこばしたことは事実である。日本でもまた夢の夢であった自動車所有を大衆の現実のものとした。

企業だけが望むのでなく、大衆の希望に応え、あるいは大衆の希望をつくりださなければ、自動車工業がこれだけ発展することはなかった。

しかし、自動車の急速な増加は、都市の膨張、拡大を可能にし、鉄道経営を没落させてゆき、排ガス公害や、車の渋滞をまねく。鉄道の路線が廃止されるのは淋しいし、困る人も多いが、だからといって、車を持っている人々が、それをやめて、すべて鉄道に乗りかえようということにはならない。

大衆は便利さと快適さを求めた。それは、日本の場合にかなり実現した。大衆は豊かになり、企業は世界に広がるまで成長した。しかし、どのようなものにも必ず対価が支払われる。いまの欲望や要求に応えるかわりに、潜在的な問題が発生し、顕在化している問題もおきる。

人々は便利さを求め、企業はそれに答え、政府もタテ前はとにかく、人々や企業に迎合する。その結果、便益を生み、便益は便益を求め、都市を成長させ、巨大都市をつくる。便益だけを求めてゆけば、都市は巨大化しますます巨大都市に集中するだろう。

その極端な結果は、最近の東京への一極集中と、その結果の狂乱地価である。これは都市が異常な高熱を発しているようなものである。人間なら死んでしまうが、都市は急には死なない。しかし人間的な感性の希薄化、ストレスの上昇なども含め現代の都市文明は病んでいる。

都市は大衆の論理と企業の論理で動く以上、未来へ向けてもますます集中をすすめるだろう。集中に耐えられない人や企業を外へ追いだしなお集中を強めてゆく。それが都市文明をいっそう病に蝕ませる。四全総では東京の世界都市化を言った。

都市の未来を語るとき、ここにインテリジェント化した巨大なビル群の林立と、国際大空港、リアモーターカー、高速道路、さらに衛星通信を受け光ファイバーで接続された交通・通信網の整備による未来の構図を書くことはできる。もちろん新しい文明の時代に、文明の先端技術を利用して都市をつくるのは必要なことである。しかし、問題の認識をもたないで、ただ便益の増加だけを考えるのでは、けっきょく世界の都市を数極の超巨大都市に吸いとってしまうだろう。便益手段は人間のために用いられなければならない。

都市の時代の都市は、ひとつの生命体のように、巨大であればあるほど、ますます膨張する構造をもつ。それは栄光に輝いているように見えながら崩壊の一步手前を意味する。欧米ではすでに都市の衰退現象を示している。我が国の場合、比較的その現象が見られなかったのは、世界を相手にした高度成長と、源流は分かれていても、現在、日本人という単一民族になり、それが排外的に都市を構成し、階級社会がゆるやかであったためである。しかし、いつまでも世界を相手に稼ぎまくり高成長を続けてゆくことはできない。国際化の波の中に、しだいに異人種共存の姿を取りつつある。それは、日本の都市にもさらに大きな問題を投げかける。

都市の時代だからといって、超巨大都市にすべてが集中してゆくのが望ましいわけではない。ただ、何もせずに、大衆と企業の目先の欲望を充足し、希望を充たしてゆきだけなら、集中は集中をよび、超過大都市をつくる。巨大化すれば、一層必要になるオープンスペースも、巨大化の障害になるといわれ、規制緩和、さらに過密化への道を歩む。そのような現在の流れにだけ従っているのでは、遠くない将来に都市は人の住めないところになり、必要な人の住めない所となり企業もそこでの立地条件を失なう。大衆の希望に応え、企業の欲望を充たすことだけを追っているのでは、かえって生活基盤を崩壊させる。

都市に住むことが必然の流れだとしても、すべてを欲望のままに放置し

ておくことが望ましいという予定調和説は都市には成立たない。都市の時代になればなるほど、人々は意志をもってコントロールしながら都市をつくらなければならない。どのように都市を配置し、どのような都市の姿をつくり、どのように生活するかは、人々がつくるものである。自然は神がつくり、農村は神の造化に人間が少し手を加えた。しかし都市の時代の都市は、与えられた自然をもとに、人がつくり、人が制御するほかはない。現在はよくても将来問題があるなら、今から必要な手段をうっておく必要がある。そうした手段が都市政策であり、フィジカルには都市計画とよばれ、また空間的にはアーバンデザインとよばれるものである。

これらの手段は、評論や学問としてだけ研究されているのでは足りない。もう抜きさしならない都市の時代がそこへ来ているのだから。実践の場で政策がたてられ、計画が実行されなければならない。しかし、政府が一方的に政策や計画を実行することもできない。

都市の問題は、時代の問題であるが、また、万人にとってごく身近かで日常的な問題である。あまりに日常的すぎて、今日の要望だけにおちこんではいられない。都市に住む市民が自分たちの問題として都市の時代を切り開く政策や計画を考える時代なのである。

考えるべき問題は山積しているが、そのうち基本的な課題のいくつかを検討してみよう。

#### 4 都市の時代の主要課題

都市の時代への転換は、文明史的に見れば、あるときに一時に嵐のようにおそってきたと見てよいだろう。それは、過去のすぐれたものを評価したり、未来への基礎がためを十分にした上で切り開いていったものではない。欧米ではその嵐が早目に訪れ、これに対する対策をうってきた。日本の場合、やや遅れてきただけに、他に学ぶ機会には十分にあったはずだし先覚者たちは、警告を発し、種々の提案を行ってきた。

しかし、日本の場合、その嵐を追い風と見た。反省や、過去の評価や、未来への基礎づくりをするよりも一抛に波に押し流され、それを利用して、高度経済成長をとげ、貿易面では世界を席捲した。無批判な高度経済成長は、政策の結果というよりも、個々の経済活動を流れのままに放任するということであり、放任の結果は、激しい都市化、しかも、質の悪い都市化により都市の時代に入った。成長のスピードと量だけが優先され、コントロールする政策のないことが政策だとさえいえる状況であった。問題が極端に顕在化した点についてだけ、対症療法的な対策をうってきた。本格的な都市の時代を迎える今、部分的な対策ではなく、根本的な政策とその実践が必要なのである。

都市の時代をまねいたものは、人口の急増、科学技術の進展と産業構造の変化、そして大衆社会の出現による。これらは、乳児死亡をへらし、医療を発展させ高齢長寿を可能にし、科学技術の恩恵で肉体労働を頭脳の労働に変え、一次産業人口は二次、三次へ高度化した。人々に多くのすぐれた便利さを享受させ、日常生活を豊かにし、遠距離の人々との交通・通信も可能にした。しかもそれらの恩恵を一部の人々の独占ではなく、広く大衆の希望に応え、車や電機製品などで大衆を豊かにさせた。

この文明の流れは、ローレンツが指摘する「文明化した人間の8つの大罪」では、人口過剰、生活空間の荒廃、人間どうしの競争、感性の衰退、遺伝的な頹廃、伝統の破壊、教化されやすさ、核兵器などがあげられている。ローレンツはこれらの根本問題として「生きているエコシステムの構造の特徴と機能の狂い」をあげている。それは人間という生物的な欠陥だとも指摘する。いま、これらの議論を十分に行うスペースはないが、都市の時代は人類文明の爛熟期にあることはたしかで、ほっておいても成長してゆくシステムの帰結であり、そこに多くの問題を発生させた。だから、四全総にのべているような、交流の促進はよいとしても、そのための交通・情報手段の発展は、とくに言わなくても、その方向に確実に進んでいる

し、遅かれ早かれ実現してゆくものである。その結果、国際化、情報化は当然すすむ。それは都市の時代であることと同義語でさえある。

それよりも、ほっておいてはうまくいかない課題、あるいは成行きにまかしていたのでは困る問題こそ政策課題として取り上げられなくてはならない。都市の時代は問題も多いが、しかし都市の時代は、人類文明の究極の到達点かもしれない。私は、今とは違う未来都市のイメージをもっているが、それは中未来都市の時代に取り上げられるもので、ここでは省略しておこう。いまはまだ初期都市の時代の入口であり、まず近未来を問題にしておきたい。都市は問題も多いが、一般の人々は農村の時代よりも、多くの点で便益を得たし、また都市型社会の特色である自由、開放、個性尊重、進歩性はこれからも伸ばしてゆくべきものである。そこで、問題の発生を未然に防ぐ制御手段をもちながら、都市の利点を進展させてゆくべきであろう。

ここでは、制御すべき基本問題として、①居住の場としての都市、②生産の場としての都市、③自然と都市、の3つの基本的課題を考えたい。これらは、ごくあたりまえの問題だが、あたりまえのことが、かえって一番難しい。国際大空港もリニアモーターカーも、テレポートも、都市の時代の論理の中では、ほっておいても進展する。しかし、3つの基本問題は、放置したままでは確保されない。

## 5 居住の場としての都市

都市の時代は、都市は人類にとってかけがえのない居住の場となる。農村の時代のように、都市を単なる働き場、稼ぎの場、そして遊び場としてだけ見るべきではない。もちろん、これらの機能も都市に必要なが、それを居住と共存させなければならない。

環境的に居住できない都市、通常の人々の経済力では居住できない都市、働きにゆくに満員電車で1時間半も2時間も通う都市、そのように居住

性を失なった都市は、もはや都市ではない。東京はそうなりつつある。それよりも東南アジアのスラムやカンボンの方が居住性がある。貧しい人でも居住できるし、非人間的な通勤を強いられるわけでもないし、何よりも、相互の暖い人間関係が存在している。

居住の条件として重要なのは、体も心も人間らしく生きられるということである。安全であることは当然だが、生活を支える供給処理施設、交通施設、医療施設、文化施設が十分であること、さらに、ゆったりとした規模、人の心をなごませるオープンスペース、緑や水や花、美しい景観など、空間の条件のほか、気持よく生活できる人々の暖い心やふれあい、そしてゆしさを、時によっては刺激も必要だろう。

こうした好ましい居住のための条件をあげることは容易であろう。だが、こうしたことを誰かに要求していれば、すべてが充足されるというわけではない。たしかに、自治体政府をはじめ、中央政府も、おそまきながら生活の充実には少しずつ努力してきている。欧米と比べるとまことに不十分だが下水道の普及率なども少しずつ上がってきた。国民所得の割に、こうした生活のための社会資本整備がおくれていたことはたしかだが、かつてのように、そんなものは不要だという者はいなくなった。だから徐々に充足はされてゆく。また、企業も、経営採算上可能なものは大衆に提供してきた。日本の一流デパートは世界のデパートのなかでも最も充実しているといえるだろう。

しかし、大衆が要求し、要望しただけで、すべての居住条件が充足するわけではない。むしろ充足につれて問題も大きくなった。その第一は、居住と、都市の経済機能とは、同調する側面と矛盾する側面との二面をもっているからである。経済機能の充実を願わない都市はないし、人もいない。経済機能が衰退すれば、人々は生活を維持できないし、都市も機能を維持できなくなる。だから経済機能の充実をはかる。だが、さらに経済機能を重視してゆけば、居住条件との衝突を生ずる。かつての公害問題

はそうであった。そこで何とかトータルな都市環境として妥協し、解決していった。しかし、それだけではない。経済的に発展すれば地価をつり上げ、居住の規模を小さくさせ、質を低下させる。広いオープンスペースや緑がほしいが十分に確保できないし、それらは経済機能のために転用されてゆく。経済機能の充実是人々を都市へ吸引するが、同時に居住条件を悪化させているのである。東京はその典型だが、居住しにくくなった分だけ、経済機能が充実しているとさえいえる。困ったことに、人の住みにくくなった分だけ、また人を吸引し集中させているのだから、二重に居住条件は悪化しているわけである。

第二は居住と職場の分離による矛盾である。かつては農村はもちろん、都市でも居住と職場の場所はほぼ一致していた。それが居住と職場の分離を促進するのが都市の姿になった。それは先にあげた都市の経済機能の充実のためであるが、もうひとつ、居住そのものを騒音から避け、より好ましい居住条件を求めたものである。小林一三の経営により、すでに明治年間に始められた池田室町の住宅開発はこの意味で画期的な、庶民への良好住宅の提供を行ったのである。ところが、それをひたすら続けてゆくことにより遠距離満員通勤を生み、居住の場はただのねぐらに変化した。さらに、遠距離に大住宅地を開発し、高速鉄道で都心へ通勤させればよいという提案がしばしば登場する。この方法がくりかえされれば都市は無限に拡大する。部分的には大衆の希望に応え、良好な居住条件をつくってきたのが、大局的には通勤距離の時間のロス、居住感覚の希薄化などをひきおこし、トータルには居住条件を低下させている。技術的には遠距離から短時間で通勤させることは可能でも、通過地点の問題、都心の過密などから、実際には技術手段どおりに、距離を短縮することはできない。それよりも通信回線を利用し、通勤を不要にする方向の方が技術的にも実際的にもたやすい。いずれにせよ、居住条件をよくするために行われ、実際に大衆の夢をかなえていった職住分離は、そのためにまた居住条件を悪化するという矛

盾した結果を生みかねない。

第三には都市居住そのものの矛盾である。広い道路も、上下水道も、ゴミ処理施設もほしい。しかし、それがあがる密度と規模をこえたとき、居住する人々の反発を買う。居住のために必要だった道路も、下水処理場もゴミ焼却施設もそして保育園や福祉施設、さらに公営住宅さえ、居住環境をそこねるという反対を受けるのである。

都市は多様な自由度を求めて成立した。しかし、同時に都市も共同生活の場であり、ルールや約束ごとがあり、上からの規制ではなく、住民の意識の中でそれが承認されていなければ、衝突や闘争が起き、かえって自由度を享受できないだろう。自由とルールは矛盾するが、自由をおさえるルールが存在しなければ好ましい居住環境はのぞめない。美しい町をつくるには、めいめいが自由だけを主張するのではなく、協調と調和が必要である。

人間の関係でも、都市では個人の自立性、独立性、プライバシーなどを重んずる。だが、それは孤立、独善でいいということではない。また、孤独や、あるいは、社会的不適応によるストレスも放置できない。個人を確立することは、多様で自由な人々のつながりを可能にするためにこそ重要なのである。

第四には、市民から隔離した権力者のつくった都市に住むのではなく、都市は都市住民がつくるのである。要求・陳情を充たすためには、それによって必要となる費用を負担しなければならない。国からの補助金をあてにするということは、打出の小槌で資金が天から生みだされるのではなく、自分たちの税金としてはねかえてくるものである。また、あるときには、何か別のことをやめたり、がまんしたりすることになる。日照の確保をのぞむのは、当然自らも高い建築を自制し日照の被害を他に与えないようにしなければならないということである。要望は自分の負担にはねかえることを知りつつ、それでも必要なことを行ってゆく。

このように居住条件の改善を阻む要因を取り除くには、要求・陳情型では



解けない。

第一の居住と経済の矛盾に対しては、いゝとこ取りをすることも、耳に甘い声だけでは解決できない。かといって極端な二者択一でもなく、両者の共存を可能にする都市のあり方、国土のあり方を考えるべきである。これまで、とかく居住の側が軽視されてきたが、居住のウエイトをひきもどすべきだろう。すると必然的に過大都市の抑制や、分散型国土の構図が考えられる。それには近視眼的な経済の論理を抑えることが必要である。

第二の課題に対しては、情報化がすすみ、職住の一致を可能にしつつある、職住近接の方向を考えてゆくべきだろう。

第一、第二の課題に対しては、たんに経済のメカニズムや、今、現在の要求に迎合しているのでは解決されない。経済の論理は短期的論理である。もっと息の長い長期的論理を可能にすることが必要である。土地政策などの基本政策が主要になる。そのため、政府、とくにそれぞれの都市の自治体政府の役割が大きい。

第三の課題に対しては、住民の相互理解、全体理解によるほかはない。その仲介と調整の立場として住民は自治体政府をつくったはずである。その自治体政府は、なにがその都市にとって最も好ましいのかを考えて、政策や計画の提案をおこない、住民とじっくり話しあって、なっとくのいく将来方向を探索すべきである。

第四の課題は、主として市民の意識の問題であるし、自治体政府の対応の仕方による。目先だけにとらわれず長期的に都市を変えてゆく場が必要であろう。

また、居住の場としての都市を考えるときに、基本となる環境財について、共同のものとして認識し、管理してゆくシステムがどうしても必要となる。環境財とは、土地、水、空気が基本である。これは一人の人の独占や、もうけの対象になるべきものではない。土地はこの点、いまだに一般

の私有財産とみられており、都市の時代化に合った都市全体のために役立つ利用を可能にする改革がどうしても必要なのである。また、これらの環境財は、地域ごとにひとつのまとまりと、地域的な特性をもっている。寒冷地と温暖地、平地の多いところと少ないところ、海岸か内陸か、人口が多いか少ないか、これまでの歴史、文化などにより異なっている。これらを全国一律に扱うことはできない。地域ごとに共同のものとしてコントロールする必要がある。それには住民の合意と、合意をうけた地域ごとの政府が必要である。自治体を環境財をコントロールできる市民政府にしてゆかなくてはならないだろう。

## 6 生産の場としての都市

都市は居住の場であるほかに、新しいものを生み出す場でもある。それは創造の場であり、生産の場でもある。

もともと都市は食糧や生活物品の消費の場であった。密集した多数の生活者がおり、自ら食糧を自給自足できないのだから、都市は本質的に消費の側に立っていた。だから都市の時代以前は5～10%でいどしか都市化することはできなかった。しかし、それは食糧の消費ということであって、都市はいつも新しい文明や文化を生みだしていた所であった。ヨーロッパ中世都市は、多くの職人たちが都市をつくり支えてきた。食糧こそ生産しなくても、技能をもち実用品から工芸品までをつくりだしていた。ブラッセルのグランパレスやアントワープの大広場をとりまくギルドの建築物は、彼らの生き活きとした活力と創造力を感じさせる。手工業だけでなく商人たちも、新しい販路を開拓し、新しい物を求め、やはり創造的な仕事をしてきた。

農業社会は技術革新も多少はあるが、多くは前年の繰返しで行われた。放畜社会は、何千年の昔から今日まで変わらない。しかし都市社会は、本能的には、他に開かれており、異種の人々を受入れ、交流し、それによつ

て新しいものを生み出すものである。都市の時代の都市も基本的には変わらないどころか、交通・通信の発達で、ますますその範囲が広がり国際化し、地球化してゆく。すでに古代の時代から、都市が国際化するのあたりまえのことだった。島国でもあり、鎖国政策をとっていた日本の事情はやや特殊であり、一般的に言えば都市にとって国際性は当然のことなのである。

都市がつくりだすものは、広い意味の文化だが、学問であり、芸術であり、商売であり、技能であり、娯楽であった。それらの創造されたものが文明としての都市を形成していった。ギリシャの昔から都市は消費するだけでなく、最も時代の先端的なものをつくりだす場であったのである。

都市の時代への転換期の幕明けである産業革命の時代から都市は変化した。広い意味の文化の生産の都市から、文字どおり物を生産する工業都市へと転換したのである。しかも、圧倒的に大量の物を生産することになった。このため原料と労働力を広く各地から集め、また、エネルギーを求めた。大量の製品とともに、大量の汚染物質もまた排出した。都市は工業製品と廃棄物の生産の場へ変化した。

それ以前は、物づくりは専ら農村の仕事で、都市は、附加価値の高いものをつくっていた。少品目を大量につくるのは、農村と似ている。工業社会の基幹産業である鉄鋼業も、案外コメづくりとそう変わらない農村型構造をもつ生産であった。だから巨大企業も一種のムラをつくっていた。これは農村型社会から都市型社会への中間的な存在であったと見てもよい。

しかし、今日の様相は変わってきた。工業自体も、重厚長大から軽薄短小の時代へと変わりつつある。単純な大量のモノづくりなら都市でなくても装置があればすむ。多くの労働者を必要とした時代には、労働力を得やすいために都市に立地し、あるいは都市をつくった。都市に住む労働者がモノをつくった。それらは今大半は装置でできる。装置をおく場所なら、別に都市の中でない方がよい。

軽薄短小、多品種少量生産の時代はちがうファッションやデザイン性を加え、異質のものを組み合わせ、ウォンツといわれるような多様な市場のニーズを敏感にかぎとらなければならなくなっている。つまり、工業も都市型時代の生産に変わってきたということである。したがって生産そのものよりも管理、販売、技術開発、調査などが重視され、多様異種のものが交流し刺激しあいやすい都市に立地する意味をもつ。

産業革命が都市を大きく膨張させ、変質させたが、都市の時代が本格化したここへ来て都市の本質である新しい文化創造の場に帰ろうとしている。都市は単なる消費の場ではなく、何か新しいものをつくりだす場なのである。情報の発信基地といってもよい。情報を受けるのに便利な場であると同時に、情報をつくりだし、情報を発信する場が都市である。情報をつくりだすには、さまざまな形でモノやヒトや情報が集められ、刺激しあい組み合わせられ、新しい表現がモノやヒトやコトという形をとって文化をつくりだし、それが情報として発信されるのである。もちろん新しい情報といっても、新奇を追うものだけではなく、伝統に基づくものや、古いものを現代に生かしたものなどさまざまである。いずれにせよ、それが他の地域や人々に対して意味をもつものであること、つまり何らかの独自性と個性をもち、他に対して刺激を与えられるものであることが必要である。

都市の時代は情報過多の時代である。ありふれた情報、イミテーション情報では意味がない。他の情報と判別できる独自性が必要なのである。一人の天才から生まれる情報もあるが、現代の都市という場合は、多くの多様で異質な人々を共存させることによって、そこから新たな文化を発見し、創造したりできる装置である。

都市は生産の場であるということは、それがなければ、都市の経済は成立しえないし生活ができないということである。工業化時代の都市は、原材料を加工して製品をつくった。これからの都市はモノをつくるよりも、

もっと情報度と加工度とチェの加わったもの、あるいはチェヤコトなどさまざまなものを生産しなければならない。

都市が大量生産的なモノづくりだけに依存していた工業化時代は、都市というよりも、モノづくりの装置だったのである。これからの都市は、モノづくり装置ではなく、チェづくり装置、文化づくり装置、情報づくり装置に重点を移さなければならない。そうでなければ、経済メカニズムの中で、突如企業が生産を中止するとき、都市は解体する。農村が農業をやめれば、村が解体してしまうのはあたりまえである。都市はモノづくりをすることが必要なこともあろうが、モノづくりだけではなく、それ以上のものをつくりだす仕組みをもっていなければ、経済と技術の変化の中で消えてしまうだろう。

都市の時代には、都市こそが人々を豊かにし、創造させるものになるだろう。また、そうした能力をそなえない都市は衰退せざるをえない。しかし、すべての都市が創造性をもちうるかどうかは分からない。現にともすれば生き生きした生気を失なっているところもある。都市の時代は全部が都市になるということだが、それは都市の間での競争を強めるだろう。何かを生みだしえなくなった都市は衰退せざるをえない。

かつて生産と居住とは都市の中で反発しあっていた。しかし、これからの都市で新たなものをつくりだすのは人間そのものであり、人が気持ちよく住める文化的居住性のない所に創造的な生産性もまた育たない。居住条件は都市の生産条件と一致するようになってゆくだらう。

## 7 都市と自然

都市の時代には、今よりもいっそう強く、自然が求められるだろう。人間が人間である限り、人工物の中だけでは生きられない。しかし、都市時代の文明は、もはや人間を自然とともに生活するかつての農村型社会へ戻すことはない。農村も漁村も形としては存在しているが、そこさえも、一

種の都市であり、都市との直接の関係をうけた都市現象に覆れる。北海道の漁村も、札幌や東京と直結していき、その市場の動きが情報として、魚を動かす。確かにそこにきびしい海という自然はあるが、生活のメカニズムは都市生活にくみこまれている。

それでも自然に近く、自然を相手に生活している人々はいい。それはほんの一握りにすぎない。日本の第一次産業人口は9%ほどだが、そのうちから専業農家だけをとると、すでに総人口の2%ほどになっている。アメリカの農業人口も2%余りだからそうおどろくにあたらない。アメリカの2%余りの人々が、アメリカ人の胃袋ばかりか、日本人やソ連人の胃袋もまかなっている。そして今や日本人のコメさえもまかなおうかというほどである。

自然と接することの少なくなった都市人間は、建物の中に自然を求め、アメリカの新しい建築にみられるように、巨大なアトリウムの中に植物をもちこむことが多くなった。都市の中にも自然が求められる。ロンドンでは、運動などをする公園のほか、自然のままのヒースが残されている。ドイツ人たちは都市の周辺を都市森（シュタット・ヴァルド）で囲み、休みの日に散策する。ウィーンの森は大きなシュタット・ヴァルドである。欧米諸国ではすでに今世紀の初めから、都市に自然をつくりだすことを行ってきた。日本は、貿易で外国からドルは稼いだが、自分の都市の公園・緑地面積は欧米の数分の1、あるいは数10分の1にすぎない。わが国の都市が、都市の時代の都市として生きぬくためには、高層ビルや地下鉄や高速道路だけでなく、都市内の自然が必要なのである。そのために今後よほどの努力を続けなくてはならない。

しかし、都市内、あるいは周辺に自然をおいても、それはそうスケールの大きな大自然ではなく、人工自然や小自然にとどまる。そこで、都市の人々は、機会を見つけて、中自然あるいは大自然を求める。海、山、森、川、湖、高原、そうしたものを求める人々が増加する。

リゾート開発がこのところにわかにブームになってきたのは、こうした本格的な都市の時代が背景にあるため、人々の自然指向が強まるからである。しかし、リゾート開発と称し、自然に頼りながら、その自然を失ってしまうような例も見られる。リゾート開発は自然を都市にしてしまうことではなく、都市人のささやかな居場所や愉しみの場を自然の中にあけてもらうことである。自然は一層自然にしなくてはならない。

部分的に自然が変更されることはやむをえない。しかし、それは都市の飛地的スプロールではなく、あくまでも自然が主体でなければならない。そのためには、自然をつくり出すような作業も必要なのである。

## 8 自立した個性的な都市をめざして

これまで述べてきた、都市の時代にある未来の都市にとって、都市を真に居住の場とすること、都市を生産的な価値を生みだせる場とすること、都市の内外に自然を確保しておくことの3点は、最も基本で、最も当然であるのに、最も実現は難しい。都市の時代は、放っておけばコントロールのきかない暴走車になってしまう。チエのある人類文明には都市を制御できる方法が必要で、それに基づく政策や計画がなければ上の3点は実現されない。

道路・鉄道・空港・通信などの施設の整備はすすむだろう。巨大ビルが建ち、再開発も次第にすすむ、大会議場やホテル、見本市会場やビジネスビル、ショッピングの施設も小ぎれいな装いで次々と登場してゆくだろう。だが、放っておけば、それらは経済の論理を求め、集中に集中を重ね、巨大都市をますます巨大化させ、矛盾の方が増大して一極集中となり国土全体としての活力を失なわせる。各都市は個性を失い平板化し、活き活きとした人々のチエや活力を奪ってしまうことになりかねない。

都市とはもともと、多様で異質の要素を結合し、新しい創造を行う装置であった。それは風土や歴史、人間のチエや営みによってさまざまな組合

せや、構成が可能であり、そこに独自の魅力をもった都市をつくった。多様な人々を共生させることが都市の本質であれば、多くの個性的な都市が生まれることも当然である。多様な個性ある都市を国土の中に散りばめることによって、国土の中にある風土や歴史や人々のチエを最大に生かすことができる。また、経済の変動にも、すべての都市が一様にその意味を失なうことはない。そして、多様な個性的都市の存在こそが、人々に多様な居住性を提供することになるし、また、異質のものが刺激しあうことによって活力と創造力を高めることができる。もちろん、市民の側からみても、超巨大都市の中に投げこまれて一様化されている人々にとって、もっと身近かな自分たちの都市を発見できるだろう。都市や国土の政策を実現するためには、政府の力だけでなく、市民が自らの問題としてとらえることができる必要がある。

四全総では、多極分散型国土の均衡ある発展をうたった。交流が必要で、そのためにネットワークとしての交通・通信施設の整備が必要だとする。前にものべたように、交通・通信施設の発展と高度情報化社会の出現は、とくに計画でいわなくても個別の計画の中で推進されてゆくだろう。しかし、それだけではかえって一極集中をまねくことになる。交流とは互いに交流すべきものを持っていることが必要で、そうでなければ中央集中の直流となってしまう。交流には、東京以外の都市がそれぞれ主体的な個性をもつ情報発信都市になることが必要で、そうでないと多極分散化はできない。

また、交通・情報手段の発展にもかかわらず、各都市が魅力と主体性をもつためには、多極分権でなければならない。中央省庁の機関を地方に分散するというのは分権ではない。これらの機関はたえず中央に目を向け、その指示で動き自ら情報発信源ではない端末受信機関にすぎないから、地方をますます中央統制に従わすことになりかねない。それよりも、各都市は独自の経営が可能であり、市民のチエや力をフルに発揮できる本来の自治の姿に戻すべきである。成熟国家である我が国が、いまだに手とり足と



的にさまざまな補助金や法令やマニュアルで都市を縛りつけるべきではないだろう。自立性と自由度を与えてこそ創造性のある多くの都市が輩出する。もちろん各都市は自らの経営に責任を負う。創造性や個性を失なった都市は時代の流れの中でやがて衰退してゆく。

都市が主体性をもつことによって、市民は初めて自ら都市を育てる意識をもつだろう。要求・陳情型では都市の時代の都市はつくりだせない。

サンフランシスコの南カーナリーは、人口僅か4,5千人の小さな町だが、町には郵便のための番地もない。郵便は各自が局の私書函にとりにくる。ここで芸術家たちが、他にわずらわされないで自由な生活を行っている個性的な都市である。すぐ隣の町には最高級のリゾート地があったかと思うと、キューカーの貧しい人々が厳格な禁酒を行っているなど、それぞれの小さな都市が個性ある多様な生活の仕方をそれぞれ独自に選択しそれらの各自治体が隣接して共存している。

このような可能性を求めれば、日本の各都市はもっともっと多様な魅力を創出し、演出できるはずである。都市自治を認めないため画一化し、画一化のために巨大都市へだけ吸収される。真に国土の均衡ある発展を求めらるなら、都市の自治と、市民の自立性を求めなければならない。

都市の時代は一方において巨大な都市星雲をつくりだした。それでは市民は自分の都市にも実感をもちえないだろう。市民は、国民である前に、まず自分のものと確認できる都市をもつ都市市民でなければならない。都市の時代ではどこにいても都市住民である。だが、自分が関心をもち、こだわりをもつ小さな単位の都市が要る。大きな状況では慢然とした流れの中にあって、なかなかこれを変えることができないが、小さな単位なら、少数の市民の力で、新しい魅力を生むことができる。それが、ユニークさをもてば、大きな流れも変えてゆくことができる。未来を拓くには、市民にとってはまず、自分の都市を選び、そこでの小さな実践こそが、魅力ある都市の時代を切り開くカギとなる。

流れのままに流されつづけるのが都市づくりではない。未来の都市は具体的な小さな場から流れを変えることにより生まれる。その主体である、小さな単位でチエと力をもつ個性的な自治体と市民に期待しよう。

(法政大学法学部教授)

## 全国市長会の月刊誌

# 市 政

都市行財政の論策・解説、内外諸問題の時評・批判をはじめ、都市研究に資する記事、あるいは情報・資料・話題・随想、その他により広く市政人の知識を高める、都市関係総合月刊雑誌。

---

全国市長会 〒102, 東京都千代田区平河町2-4-2  
電話 03 262 5231, 振替東京3 172124